

IX 保育者に関する研究

園長の自己評価法について

大阪樟蔭女子大学 西本 脩

XX

I 資料の評価段階表

得点								評価
教育愛	統率力	誠実	責任感	公正	寛容・協	品位	合計点	段階
18以上	32以上	23以上	23以上	23以上	27以上	18以上	164以上	A
15~17	25~31	18~22	18~22	18~22	22~26	15~17	131~163	B
10~14	18~24	13~17	13~17	13~17	15~21	10~14	92~130	C
7~9	11~17	8~12	8~12	8~12	10~14	7~9	59~91	D
6以下	10以下	7以下	7以下	7以下	9以下	6以下	58以下	E

II 職務実績の評価段階表

得点								評価
園経営一般	組織・編制	保育の計画・実施	職員の指導・監督	施設・設備の管理	事務の握	対外活動	合計点	段階
41以上	18以上	36以上	27以上	32以上	23以上	23以上	200以上	A
32~40	15~17	29~35	22~26	25~31	18~22	18~22	159~199	B
23~31	10~14	20~28	15~21	18~24	13~17	13~17	112~158	C
14~22	7~9	13~19	10~14	11~17	8~12	8~12	71~111	D
13以下	6以下	12以下	9以下	10以下	7以下	7以下	70以下	E

III 総得点の評価段階表

総得点	評価段階
361以上	A
281~360	B
201~280	C
121~200	D
120以下	E

問題 多くの園（幼稚園・保育所を含む）では、園長（幼稚園長・保育所長を含む）が組担任として直接幼児の保育にあたることは少ないかもしれないが、所属する保育者が働らきやすいような組織・運営を行なうか否か、あるいは施設や設備の管理がゆきとどいているか否かということが、日頃の保育の效果に大いに関係しよう。このような点から、園長も組担任の保育者と同様、幼児に影響するところが大きい。したがって、幼児の幸福をはかるためには、園長も、たえず、よりよい園長になるよう、努力しなければならない。そのためには、自分が果してよい園長であるか否か、あるいはまた、自分がよりよい園長となるためには、いかなる点を改善する必要があるかについて、いつも自己評価を行なう必要がある。ここでは、主観的な評価でなく、客観的・合理的に自己評価を行なうための資料を提供しようとする。

方法 五段階評定尺度法。評価項目は、(1)園長としての資質をそなえているか否かの評価（三六項目）、(2)現在の勤務実績のよしあしの評価（四四項目）、合計八〇項目からなっている。それぞれの項目について五段階の評定を行ない、各評価要素ごとに、その合計点をだし、「評価段階表」によって、評価段階を知る。また、これらプロフィールに現わすことによつて、自己の長所や弱点を一見して

自己評価プロフィール

評価要素		得点	評価段階				
			A	B	C	D	E
資 質	1 教 育 愛						
	2 統 率 力						
	3 誠 実						
	4 責 任 感						
	5 公 正						
	6 寛 容・協 力						
	7 品 位						
合 計 点							
職 務 実 績	1 園 経 営 一 般						
	2 組 織・編 制						
	3 保 育 の 計 画・実 施						
	4 施 員 の 指 導・監 督						
	5 施 設・設 備 の 管 理						
	6 事 務 の 掌 握						
	7 対 外 活 動						
合 計 点							
総 得 点							

明らかにすることができる(評価項目の詳細は、「日本保育学会第十三回大会発表論文抄録」を参照していただきたい)。

結果の利用 これは、園長を格付けするのが目的ではなく、前にも述べたごとく、これによって、園長自身が自己の長所や短所を知り、自己反省をするために作られたものであるから、これを手がかかりとして、自己評価をおこない、反省と修養のための資料として十分活用してほしい。

(大会発表論文抄録80-82頁)

保育者の適性に関する予備的研究

お茶の水女子大学 吉田三和子

津守 真

この研究は、どのような幼稚園教師が、子どもに対してもっともよい影響を与えるか、ということを知るために、教師の態度を調査する尺度の作成を試みたものである。私どもは、教師と子どもとの健全な人間関係の中で、子どもの健全なパーソナリティを発達させることができるかと考える。教師が子どもの生活をすべてを支配するようなどころでは、教師のエネルギーだけが生かされて、子どものエネルギーが生かされない。子どものエネルギーが適当な通路を与えられ、子どもの経験や考えを生かすことのできるような教師は、子どもの発達にとってよい影響を与える教師であるということができよう。このような考えのもとにまず、教師がどのような行動をしているか、子どもとどのような接触をしているか、などを明らかにしようとして、保育態度を反映するような質問紙を作成した。質問紙を作る予備的段階として、保育室における実際の保育場面において異なった態度をとる三人の教師の行動を観察し、ありのままの記録をとり、それを統一的・支配的の観点より分析した。ここで統一的とは、教師の意図と子どもの意図との両者が生かされるように指導する態度であり、支配的とは教師の意図のみが支配するような態度である。その結果をもとにして、保育態度調査用紙の原案を作り、観察の時の三名の被験者に施行したら、質問紙の方が個人差が少なく現われたが、実際行動と質問紙に現われたものとは、ほぼ同一傾向を示していた。次にこの質問紙を二百十三名の女子学生に施行し二十の態度項目の項目分析をし、5%以下の危険率で有意でないもの三項目を除き、十七項目を残した。この保育態度調査用紙の結果は(1)、一般教養課程の学生より、保育専攻の学生の方が統合点が高い、と言える。(2)、保育専攻の学生については、一年生より二年生の方が平均点は高いが、学年差のtの値は1・二七で有意ではな